

聖書：マタイの福音書 2：1～12

説教題：ひれ伏して礼拝し

日時：2024年12月22日（クリスマス記念朝拝）

イエス・キリストの誕生は、ルカの福音書によると、野原で羊の群れの夜番をしていた羊飼いたちにまず知らされ、その彼らが飼い葉桶に寝かされていた生まれたばかりの赤ん坊を見ました。また生まれて8日が経ち、割礼を施すためにイエス様の両親がイエス様をエルサレム神殿に連れて行った時、老シメオンとアンナが約束の救い主であることを認めて神を賛美し、感謝しました。しかしエルサレム市民のほとんどはイエス様の誕生を知らない状態にあったことがこのマタイの福音書の記事から分かります。特に何事もなく、いつもの日常が過ぎていると人々が思っていた時、そしてこの世の生活のことで忙しくしていたただ中で、突然東方の博士たちがエルサレムにやって来て次のように述べたのですから、町の人々にとっては驚きでした。1節と2節：「イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。』」まずこの博士たちとはどのような人たちだったのでしょか。彼らは東の国出身で星の研究に携わる博士たちだったことが分かります。博士と言ってもひたすら研究室にこもる学者と言うよりは、天文学の研究と結びついた形で国の政治と密接な関わりを持っていた祭司的階級に属する人たちだったと考えられます。天文学が発達した理由の一つには宇宙の天体が規則正しく運行しているということがあったでしょう。これはこの世界を秩序あるものとして造り、今日も支え導いている神の御手を証しするものです。そのような天体にもし何らかの異変や新しい動きが見られたらどうでしょう。それは神がこの世界に何かをしようとしているしるしだ！と読み取ったとしてもおかしくありません。東方の博士たちはそのような特別な星を見たと言います。それはどんな星だったのでしょか。

しばしば言われるのはイエス様が誕生した頃である紀元前6年あるいは7年頃に地球から木星と土星が重なり合うように見えた時があったということです。普段は離れて輝いている二つの星が重なることによって、ひとときその輝きが増した状態となった。しかもバビロニアの天文学において「木星」は「王」を意味し、「土星」は「パレスチナ」を象徴したと言われます。従ってこの現象は全世界を治める偉大な王がパレ

スチナに誕生したしるしとして読み取られたというわけです。他の人は、これはそれまでなかった新しい星が出現したことによるものだろうと言い、また他の人は博士たちが見たのは彗星だったのではないかと言います。しかし一つ考慮すべきことは、9節でその星はベツレヘムへと向かう博士たちを先導し、幼子の家まで導いたとあることです。東の国で観測したあの星が再び天に現われ、しかも動いたり、止まったりしたとなると、これは自然現象よりも、神が特別に与えた超自然的な光であったと解する方が妥当であるということになりそうです。

いずれにせよ東方の博士たちはこの星を観測した時に、これはユダヤ人の間で待ち望まれて来た世界大の王誕生のしるしだと解釈しました。どのようにしてこの結論に彼らは達したのでしょうか。考えに入れて良いと思われることは、東の方とはイスラエルが捕囚された国々がある場所だということです。アッシリア、あるいはバビロン、あるいはペルシャ。いずれの地域にもイスラエルは捕らえ移されました。ですからその地の人々はユダヤの宗教についてかなりの知識を持っていました。彼らは星の研究と合わせてユダヤ人との関わりや、その宗教との接触の中でこの確信に至ったというのは十分に考えられるところです。

しかしです。今日の私たちは疑問を持つのではないのでしょうか。星の研究を通して神のメッセージを読み取ることは果たして可能なのか。第一、神はこのような方法を是認されるのかと。今日の私たちにとっての正しい答えは、聖書からこそ正しい真理を学び取るべきであるということです。確かに神はこの世界を支配しておられますから、この世界を見つめることによって神の力や偉大さ、その神聖さを知ることが出来ます。しかしそれ以上の具体的なことを知ることは困難である。ある星を見て、それはあのことを示しているとか、このことを示しているなどとやり始めたらとんでもないことになる。そんな私たちからすると、この東方の博士たちのあり方は異質なもののようにも感じます。迷信的な要素がそこに混じっているのではないかと問いたくなります。しかし私たちは彼らが置かれていた状況と今の私たちの状況は大きく異なることを考慮しなければなりません。彼らは私たちが今手にしている完結した聖書を持っていません。先に触れたようにユダヤ人との関わりから旧約聖書の言葉の端々を聞くことができたかもしれませんが、後はこの世界を見つめて何かを考えるしか神探求の方法はなかったのです。そんな限られた神知識の中で神が彼らを支えてくださったと見ることは可能です。そこには幾分迷信的な要素もあったかもしれませんが、神は

それぞれが置かれた状況から導いてくださるということの一つの例として私たちはここを読むことができるのではないのでしょうか。考えて見れば私たちも最初から完全な信仰ではありませんでした。ある人は流れ行く雲を見上げて神を感じ、またある人は出産を通して神がおられることを感じ、またある人は人生の様々な苦しみを通して神を思い、そんな中でそれまでに聞いた御言葉とそれらの経験を結び合わせて神を求め始めたかもしれません。そんな私たちも信仰のスタート時においては色々と迷信的な要素があったかもしれません。今なお、そういう面があるということもあるでしょう。しかし神はその人の今ある状況から導いてくださいます。そのように私たちのレベルまで降りて来て少しずつ導いてくださる神の恵み深い御手を私たちはここにも覚えることができるのではないのでしょうか。

そしてむしろ私たちは、この限られた神知識の中で彼らが見せた驚くべき応答にこそ注目すべきであると思います。彼らは東の方からエルサレムへやって来ましたが、それは決して月の砂漠をパッカパッカと優雅に旅して来たというものではありませんでした。彼らはこのために多くの犠牲を払う必要がありました。彼らは自分たちの国で大切な働きをしていた人たちと考えられますから、この長期間にわたる旅のためには相当な準備が必要だったと考えられます。交通機関は今日のように発達しているわけではありません。24時間営業のコンビニもありませんから、食料も生活物資もしっかり準備して行かなければなりません。また当時は旅の途中で強盗に会う危険性が高かったため、兵士たちが同行する必要もあったでしょう。とするとこれは相当な数の人々からなる大掛かりな旅だったと考えられます。ですからこれは決して遊び半分で行えることではなかったのです。ここには彼らの非常な熱心と犠牲と献身が示されています。彼らを迷信的と評することは簡単ですが、私たちには彼らが見せたような熱心、犠牲、献身があるのだろうかと思われるのです。

さて、このような東方の博士たちと対照的なのがエルサレムに住む人々です。まず3節に「これ聞いてヘロデ王は動揺した」とあります。彼はエドム出身の外様大名で、ローマ帝国からこの地の王に任命された人物でした。彼はエルサレム神殿の再建工事等、歴史に残る働きをしましたが、晩年は自分の地位と権力が脅かされることへの過度の不安に怯えて最愛の妻を殺し、自分の長男をも殺し、親しい近親者を次々に殺しました。そんな彼を見てローマ皇帝が「ヘロデの子どもであるよりは、ヘロデの豚である方がまだ安全である」と述べたのは有名なところですが。そんな彼にとって「ユ

ダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」との博士たちの問いは、とても落ちついて聞いてられるものではなかったのです。彼はこの言葉に激しく心かき乱されたのです。また「エルサレム中の人々も王と同じであった」とあります。彼らは本来、約束の王誕生のニュースを聞いて喜んで良いはずです。しかし自分たちの生活が変わることを恐れたのか、あるいはあのヘロデのこと、このニュースを耳にしたら今度は何を始めるか分からない。そのように思って恐れ震えていたのでしょうか。

王はそこで「民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただし」ました。すると彼らはすぐに旧約聖書ミカ書5章2節をもって答えます。5～6節：「彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』」 さすがこの道の専門家です。しかしです。彼らはすぐに答えることができましたが何も行動しません。このニュースを聞いても喜ぶことなく、むしろ無関心です。せっかく持っている聖書知識が、その生き方に影響を与えていません。ここに博士たちとの大きなコントラストがあります。博士たちはわずかな啓示しか持っていない非専門家でしたが熱心に応答しました。ところが聖書を手にかけているユダヤの方が、このニュースに接してもただ当惑するだけであり、冷淡であり、無反応。ここに大なる皮肉があるとこの箇所は語っているのではないのでしょうか。

さて博士たちはヘロデによってベツレヘムへと送り出されます。ヘロデは星が現れた時期について博士たちに詳しく尋ね、8節で「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言います。しかしこれはウソですね。この後の記事を読むと彼はベツレヘムとその周辺の2歳以下の男の子を皆殺しにします。つまり居場所が分かったら殺そうとしていたのです。

博士たちが出発すると、見よ、かつて昇るのを見たあの星が彼らの先に立って進みました。その星は、エルサレムに来るまで博士たちを導いて来たわけではありません。しかしベツレヘムに向かおうとする時、再びあの星が現れて彼らを先導してくれたのです。つまりこれは神の特別な導きによったということです。そしてついに幼子のいる家へとたどり着きます。彼らはどうしたのでしょうか。11節に「それから家に入り、

母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した」とあります。これは思い巡らしてみると実に不思議な光景だったのではないのでしょうか。イエス様は立派な宮殿にいたわけではありません。きらびやかな服を着せられていたわけでもありません。そこにあったのは貧しい状況だったでしょう。東の国から多くの犠牲を払ってはるばるやって来たのに、これが我々が求めた人なのか。こんな者のために我々はここまで来たのかとガッカリし、いぶかしく思ってもおかしくありません。ところが彼らはひれ伏して礼拝しました。神が与えてくださった王と見て礼拝したのです。そして宝の箱を開けて黄金、乳香、没薬を献げました。この三つの贈り物については、しばしば象徴的意味が語られたりしますが、これは彼らが献げ得る最高の贈り物だったと見るのが良いと思われます。そして帰る時には夢でヘロデのところへ戻るなど警告されたことを受けて、その啓示に従ったことが記されています。

以上の箇所から私たちは何をメッセージとして受け取るべきでしょうか。今日の箇所が語る一つの特徴的な点は、キリストのもとに来て礼拝したのは何と東の国の人、つまり異邦人だったということです。彼らは御子を礼拝するためにはるばるやって来ました。これは旧約聖書が預言していたことでした。詩篇 72 篇 10～11 節：「タルシシュと島々の王たちは貢ぎを納めシェバとセバの王たちは贈り物を献げます。こうしてすべての王が彼にひれ伏しすべての国々が彼に仕えるでしょう。」 またイザヤ書 60 章 3～6 節にも、異邦人世界から多くの者たちが贈り物を携えてやって来ることが言われていました。このマタイの福音書の一番最後の箇所は、全世界への福音宣教を命じるいわゆる大宣教命令で閉じられます。その先取りがすでにここにあるわけです。イエス・キリストは全世界の主、全世界のための約束の救い主です。私たちが今日こうしてクリスマス礼拝に集まっていること自体、異邦人がこの救い主のもとに来て礼拝するという旧約聖書の預言の成就です。神は東方の博士たちと同様、遠いところにあった私たちをも招いてくださいました。この神の導きと恵みを覚えて今朝感謝をささげたいと思います。

と同時に、ここにはクリスマスをどう過ごすべきかについての大切なメッセージがあると思います。ともするとこの東方の博士たちの礼拝を私たちは迷信的なものが混じっているものとして疑問視しやすいことについて先に述べました。そんな私たちに大切な視点を提供してくれるイエス様の言葉が 12 章 41～42 節にあります。「ニネベの人々が、さばきのときにこの時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪あり

とします。ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし見なさい。ここにヨナにまさるものがあります。南の女王が、さばきのときにこの時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。」今詳しくこの御言葉を説明する時間はありませんが、ポイントは、より少ない啓示しか与えられなかった人々が、その限られた知識の中でこのように応答したのであれば、それにはるかに勝る啓示を受けた者たちは、さらに勝る応答をすることが求められるということです。今や旧約新約 66 巻の完結した聖書を持ち、主の降誕の意味を良く知らされている私たちがふさわしく応答しなければ、東の国の博士たちは私たちに「あなたがたは一体何をやっているのか！」と言うことになるということです。博士たちの信仰がどのようなものだったのか詳しく知ることはできませんが、彼らは貧しい無力な一個の赤ん坊として誕生したイエス様を、彼らが受けた限られた啓示の中で受け止めて、王なる方として礼拝しました。私たちは彼ら以上に多くのことをはっきり知らされています。このイエス様の誕生は神である方が神としてのあり方を捨てることのできないとは考えずに、ご自分を大いに低め、無にして、人間として誕生くださった出来事です。それは私たちの罪をその身に背負い、30 数年の歩みを経て後、私たちの身代わりに十字架上で死んでくださるためです。そのためにイエス様は最初からこのような低い状態に生まれることを良しとされました。そのことを知る私たちは、この御子の前に博士たちよりもっともっと深くひれ伏して当然ではないでしょうか。私たちは博士たちを見て、なぜ彼らはこのように礼拝できただろうかと不思議がっている場合ではないのではないのでしょうか。むしろ彼らの方が私たちを見て、なぜこの人たちはボーッと突っ立っているのか。なぜこれだけのことを知らされていながら、すべてのものをささげて礼拝しないのだろうかと思ふことはあるのではないのでしょうか。

この博士たちに助けられて、私たちもこのクリスマスの時、御子の前にひれ伏して礼拝をささげる者たちでありたいと思います。そしてそうするところにあるクリスマスの真の喜びを知る者となり、神が与えてくださったまことの王による救いと祝福に豊かにあずかる者たちとさせていただきたいと存じます。